慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	關西方面史學研究旅行記
Sub Title	
Author	間崎(Masaki) 山口(Yamaguchi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.2 (1923. 2) ,p.139(299)- 146(306)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19230200-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を禁ずる法令は一八一三年五月上院を同月七日下院を通過した。此が及ぼす影響は甚大ではあつたが已にこの法令を見ずとも英國は一八一二年の末より米國の穀物に執着するの不必要なる狀態にあつたのでアメリカ人の特許狀による通商はこの法令通過以前に衰滅してゐた理である。吾人は本編によつて一八一〇年より一八一四年に至る間英國が如何なる手段に訴へて米國の穀物を吸收することに腐心したか而して米國議會は如何に此問題を取扱つたかを知ることが出來るのである。

Seward's far Eastern Policy (Tyler Dennett)

支那の門戸開放政策に關して米國の國務卿セワードは列强と協調の方針を採つた。彼の政策は前任者のそれに比して極めて放膽なものであつて就中極東に於ける米國の有利なる通商上の機會を確保した。彼は國務卿就任以前より已に極東との通商を力說してゐたが決して領土的野心からではなかつた。彼は日本に於けるオルコックやパークス等の暴力を惡み溫和な協調政策によつて東洋に於けるアメリカの利益を確保出來ると信じた。然し乍ら一八六一年の五月日本が一八五八年の條約を履行しないとの報告に接した彼は聯合艦隊の派遣を列國に提議し日本に對して强抗なる態度に出て其後彼の威嚇政策は朝鮮にも及ぼされるに至つた。一八六六年朝鮮に於ける佛國宣教師の殺害は佛國の朝鮮征伐となり更に米人の殺害は米國をして同樣な行動に出しめたけれども一面米國は佛國が朝鮮をその保護國たらしめることを恐れたがためであつた。其故この疑問が晴れてからのセワードの對東洋政策は元の協調主義に還つた。セワードの在任中アラスカを露國より買收したがこれは通商上の意味よりは海軍の根據地を北太平洋に得んとする政治的意味に於てゞあつた。要するに彼の太平洋と東亞とに對する政策は協調主義にあつたのであつて彼の採つた武斷的行爲は協調を成就するための代償であつた。本編の結論に於てセワードの人物並に彼の政策を批評せる條は吾人の頗る興味深き點である。

（恒松安夫）

彙報

關西方面史學研究旅行記

慶應義塾大學文學部史學科に於ては、例年史料研究を目的とする旅行を繼續してゐるが、今秋は名古屋、奈良、法隆寺、高野方面へ見學に赴くことゝなつた。

大正十一年十月十二日、午後十時三十分折柄池上本門寺への賑

はしき躁音鳴鼓行列を後に殘して、我等は東京驛を出發した。その一行は、先達伊木教授、卒業生間崎万里、福田四郎、學生今宮新、伊丹榮七郎、友松圓諦、山口昌、飯田茂登夫、吉田小五郎の九名。

名古屋附近　明くれば十三日午前八時二十九分名古屋驛着、文學士若山善三郎氏、史學科第一回卒業生石川一太郎氏等の出迎を受け、その案内により中區門前町なる大須觀音寶生院に向ふ。現存せる古事記最古の寫本を有するので名高い『眞福寺』も、此地では知らぬものが多い、否な全く此名では通用しない。それは、數日前に眞福寺宛の書翰が返送せられ、寶生院宛のものが到達したるに依つても分る。當寺は、人の知る如く、この界隈にて最も多くの文獻的國寶を藏有し、實に二十有九種を算するのであるが、從來容易に見ることを許されなかつたので、久しく遺憾とされてゐた。然るに新に歸朝せられた住職文學士大槻快尊氏の開明的態度は、其の閲覽を危んで居た我等に十分の滿足を與へた。その國寶について列記すれば左の如くである。

一、漢書食貨志　第四　一卷　裏、阿彌陀經疏、その奥書に嘉保二年乙亥九月二十六日書寫畢釋□海とあり。

一、瑚玉集　十二、十四　二卷　天平十九年の奥書あり。

一、古事記　三帖　僧賢瑜筆上中卷は二十八才、下卷は二十九才の時の寫本である。下卷の奥書によれば、吉田定房の所望によつて書寫してその一本を呈し、副本を留め置いたものである。

一、將門記　卷首殘缺　一卷　承德三年正月廿九日の奥書あり。

一、尾張國解文　一卷　王中貳年八月十一彼岸第三午尅の奥書あり。

一、日本靈異記　上卷缺、中、下　二卷　但しこの上卷は高野山金剛三昧院に現存す。

一、本朝文粹　十二、十四　二卷

一、本朝文粹　十四　一册

一、倭名類聚抄　殘缺　三十三葉　裏面に文書等種々の記あり。

一、熊野三所權現御記文　一卷　延久二年八月十八日戊午の奥書あり。

一、熊野權現藏王殿造功日記　二卷

一、翰林學士詩集　零本　一卷

一、七大寺年表　殘缺　二卷　永萬元年十月の奥書あり、惠珍の書寫。

一、口遊　一卷　源爲憲撰、弘長三年二月の奥書あり。

一、空也上人誄　一卷　源爲憲作、天治二年の奥書あり。

一、佛涅槃圖　一幅　絹本着色、傳沈南蘋筆。

一、弘法大師傳　數種、　其他略

右の中、古事記が就中珍重すべきものであるのは言ふ迄もない。名古屋史談會にはその寫眞版を作る計畫がある。又その奥書に就ては、其後安藤正次氏の考證が史學雜誌に發表せられた。解文及

び貪貨志は近時社會問題及び經濟史の研究者より注目さるゝものである。將門記に就ては、世既に定評のある所、筆のすさびでもあらうか、その中央部が文字の大小によつて模樣風に記されてあるのは注意を惹いた。稻葉通邦が之を模寫した版本(寛政九年版)は等しく同人の手になる倭名類聚抄の影寫本と共に世に出て居る。貪貨志と瑪玉集の影寫本も又古逸叢書の中に收められてゐる。七大寺年表に至つては、嘗つて『和銅元年又作法隆寺』(註)の記事が、喜田博士に引用せられて、法隆寺再建論の唯一の論據とせられ、同博士と關野博士、平子鐸嶺氏との間に花々しき論戰を見たのは世人の猶ほ記憶に存する處であらう。

註、最近鐵道省より出版された當地方の旅行者にとり頗る便利な『お寺まゐり』(四二五頁)に和銅三年とあるは誤植であらうと思ふ。

寶生院を出でゝ、同所七寺(ナナツデラ)に至り、本堂(阿彌陀堂)に於て、國寶木造阿彌陀如來、兩脇侍坐像及び木造持國天、毘沙門天立像等を拜した。この本堂は特別保護建造物で堂內の須彌壇は珍らしいものである。また經藏に於て國寶辛櫃入一切經を見る。この一切經は尾張權頭大中臣安長が安元々年より治承二年に至る間に書寫したもので、もと五千餘卷あつたのが、今は四千九百七十卷だけ存し、三十一合の辛櫃に分納してある。その大般若經を納めたる櫃の中蓋の表に朱漆を以て十六善神を畫き裏に猥に加點を許さゞる旨を記し、大般若經以外の分の中蓋には表に目錄を朱書し裏に一切經安置の起請狀が記してある。十六善神の像はその筆致頗る見事で、よく鎌倉時代の特色を現はして居る。當寺はもと尾州大須鄉(今は美濃國の內)にありたる中島觀音堂が、北野山眞福寺寶生院と改稱せられた後、更に戰亂と水難に廢朽頽敗して、慶長十七年現在の地に移されたもので、尙ほ舊稱を以て呼ばれてゐる。我等はその次第を想起して史囊を肥やした。『奴』に於ける『ながどん』(鰻丼)の畫餐は同好の士淺井甚七氏の好意によるところ、朝飯拔きで寶生院住持の牛乳をアップした伊木教授爰に重れて英氣を恢復す。

市電に次いで瀨戸電車は一行を矢田驛に運ぶ。靈鷲山長母寺を見んが爲である。其名も床しき無住國師の開基せる當山には、我等の全く豫期しなかつた立派な寶物館があつて、開山國師の筆蹟、讓狀、足利尊氏畫像、同書狀(二通)同直義書狀、仁木頼章書狀(五通)高山彦九郎書狀、砂石集版本十卷(之は最近當寺で覆刻したものがある)殊に先住蓑虫山人の蒐集にかゝる夥しい考古學的出土品及び畫幅類、近時印度より傳來せる小石像等見るべきものが少なくない。就中、尊氏騎馬の畫像に就ては、之と同種のものが他に二幅あり、一は當所關戸氏、他は熱田地藏院に藏有せるものであつて、何れが原本なるやに就ては異說のある所であるが、近く三幅を一所に集めて、名古屋史談會が比較研究を試むる運となつてゐる。

長母寺より更に瀨戸町に到る。時既に黃昏に迫りて陶器陳列館の閉館間際に守衛を驚かし、瀨戸公園にては、陶祖春慶翁の碑に詣でたるのみ。さすがに、瀨戸物の本場だけあつて其名に背かず、附近の山は殆んど陶器の原料として切り崩され、その生產地氣分は多くの工場によつて代表せられて居る。町そのものが經濟地理

の好資料である。

同夜名古屋に歸り、伊木、間崎兩教授は名古屋ホテルに於ける同地三田會の歡迎會に臨み、一同谷屋に宿泊す。

十四日午前七時五分、石川氏を一行に加へて奈良に向ふ。車中で手にした新聞には同行友松圓諦君の近著『地に惱める釋迦』の廣告が大に異彩を放つてゐる。舊式のルツクサツクを脊負へる登山姿の健脚家（？）は、今しがた、龜山驛で參加せられた幸田教授である。一行の活氣頓に加はる。

奈良　午前十一時五十八分奈良着、先づ興福寺の境内に、三重塔、南圓堂、北圓堂、假金堂、東金堂、花の松、五重塔、大湯屋を見て、帝室博物館に到る。當館の陳列（奈良縣帝室博物館圖書一覽、同繪畫一覽、同彫刻一覽參照）は佛像繪畫を始めとし、見るべきもの至つて多く、到底短時間のよく盡すべくもないが、略ぼその見學を終ることが出來た。中にも、俗に聖德太子の旗と稱する獅狩模樣錦はアツシリヤ風の獅子狩の光景を意匠とせるもので特に興味を覺えたものゝ一つである。

博物館を出でゝ東大寺に赴く。稻垣晋清師の懇切なる案内により先づ校倉造りの寶庫の中に納められたる數多の寺寶、就中、當寺改築の際、大佛像臺座の下より出土した聖武天皇の御劍（堆頭）や俊乘坊重源の遺物等に注目し、續いて大佛殿に詣で、先づ本尊毘盧舍那佛に額づく。先頃英國皇太子が兩度までも參詣せられてパツスせられたといふ柱拔けの妙技は我が吉田君によつて、また觀衆の喝采を博した。

像の背後にある日英博覽會に出陳した事のある東大寺模型が輸送の途上、印度洋に於て高溫のため一旦解裂し再び組立てられたること、凡そ寺院の塔の高さは寺域の大小を示す尺度なること、東大寺にもと二個の塔ありしは方域餘りに大にして、一個を以てし難き事情より兩分されて二個となり、上部に於ける一本の連絡線によつて二にして一なることを示せる次第は、現在の本寺建築が鐵骨木造なること、改築の際資金缺乏の爲間口を縮少して、舊建築に於て正面に九つあつた柱間の扉口が七つとなり、且つ廻廊の屋根も折半せられ、爲に春日神社に見る如く中央部に置かるべき筈の窓壁が著しく外方に出て來た不體裁なども實見するを得たと共に、更に法華堂、俗にいふ三月堂の内陣に入りて、天平時代の藝術の粹を輯めたる諸尊諸菩薩を拜し、僧侶修法の狀況及びその修法を主とせるが爲に南都の諸大寺が近代的の寺院と異りて外陣の小なる理由等を明かにし得たのは、偏に稻垣師の賜物である。本堂の柱にある刻文には「保延元年八月廿三日千日滿但結願九月十二日畢」「始自長承元年十一月廿八日千日不斷花也」（屋代弘賢著、道の幸）などあり、又「仁平元年十二月三十日」（續奈良縣金石年表）などいふもあるさうであるが、我等の見たるは『平治元年七月十三日千日花奉始』『久安五年四月十四日自千日花奉始畢也』とあつた。堂側手水屋の扉、一枚ごとに『東大寺法華堂手水屋妻戸也』と大々的に彫刻せるは、戰亂の際、格好の楯として持ち去らるゝを防がんが爲であつて、殊に史的興味をそゝる者があつた。

堂を出づれば暮色蕩然たり。良辨杉を見三月堂に詣で、正倉院を門外より瞥見したる後猿澤の池畔に古都の情趣を味ふ、旅舍魚佐

入りて晩餐の卓上刺身出づ、コレラの東京より來れる一座、恐れをなして躊躇せるに、間崎氏蠻勇を揮つて毒味を試む。その夜、橘寺の三尊佛の僞物を買つて得意がつてゐた學生達と好一對であつた。

翌十五日午前中は、奈良女子高等師範學校教授佐藤小吉氏の東導にて、上淸水町なる頭塔（ヅタウ）の實地踏査を試む。この塔は太宰府より飛んで來た僧元昉の首を埋めた處であると稱せられてゐるものでピラミツト型の土塔、四面數段に佛像を浮刻せる石面大小十三個あり、嘗つては皇陵に擬せられ、今猶ほ史上の疑問とされる者であつて、本旅行中の最も興味を惹いたものゝ一つである。その踏査報告は右佐藤氏によりて奈良縣史蹟勝地調査會報告書（第三回）に圖面と共に掲載せらてゐる。

かくて、晴天漫歩、路傍の土塀を越えて垂れ下れる柿の赤きに晩秋の興趣を味ひつゝ我等は高畑なる新藥師寺に向つた。寺の側に廣嗣神社がある。折節、祭禮で賑はつて居た。新藥師寺では、本尊藥師如來、十二神將等の國寶を拜觀した。特に國寶銅像藥師如來の立像（香藥師）は最も信仰の厚き御佛で嘗つて盜難にかゝられたこともあるが再び本寺に歸られたといふことである。

夫より春日神社に詣でゝ寶物を一覽し、春日若宮、手向山より戒壇院に巡拜したる後、我等は名物鹿の角伐りも見殘して法隆寺へと急いだ。

法隆寺 先づ山門を潛つて綱封藏（寶物殿）に至る。他でも見た百萬塔はこゝで一層興味を覺えた。世界最古の印刷物を現存せるこの小塔が文獻を取扱ふ我等にいかでか重視せられざるべき。塔の三層の部分は、上部相輪の部分と木材を異にし、下部は檜、上部は水木（モツコク）屋或は桂だといふ事である。もと全部胡粉を以て塗られたものであるが、今は僅にその痕跡を止むるのみ。基底には『云云二四十八（景雲二年四月十八日の略書）右口口見』などの墨書があり、陀羅尼六種の中、塔中に納むるは、根本（一）相輪（二）自心印（三）六波羅（四）の四種であつて、經文は何れも一つ一つ包紙に包まれて小圓筒形をなし固着して開かれざるを普通とするも、その何れを藏するやは塔の基部側面に刻記せる一、二、三、三（四）の數字（上記陀羅尼の下方括孤内の番號）によつて知り得るのである。平子鐸嶺著『百萬小塔肆攷』（明治四十二年刊）には之に關する詳細なる記事がある。

次いで金堂に入る。堂塔は勿論、その内部に奉祀せる諸尊像、何れか吾人の嘆賞に價せぬものがあらう。本尊釋迦如來坐像の光背銘に云『法興元卅一年』が一度び世に疑問とせられて以來、本邦の正史に傳はらざる幾多の異年號は尙ほ上古史研究上の一問題であらう。橘夫人護持佛金銅阿彌陀佛三尊像後背向つて左方上端の豆佛一體は、嘗つて金堂修繕の際大工に盜み取られて世間を騷がした事のあるものである。

金堂の壁畫は昨年の大法會以來、嚴重なる保護を加ふることゝなり、常時の觀覽を許さず白布を以て覆はれ、唯だ毎年四月一日乃至五月十五日の四十五日間と、十月廿二日乃至十一月廿日の三十日間だけを拜觀期と定められたので、十分には見ることが出來なかつた。五重塔内に塑像等を見、東院に轉じて夢殿に赴いた。この内部にある秘佛の觀世音も、毎年四月十一日より五月十五日

までと十月二十二日より十一月二十日までを觀拜期と定めてある。

法隆寺の境内を出でて、之に隣接せる中宮寺に赴いて本尊如意輪觀音の尊像と天壽國曼陀羅とを拜觀した。何れも有名な國寶で茲に喋々するまでもない。

夫れより再び法隆寺驛に歸り、やがて此處を發して、車窓南都の三山を眺めつゝ、紀州高野口に着し、葛城館に一泊する。夜中の餘興は史學科七不思議の披露であつた。

高野山　**十六日**早朝、自動車によつて、推出に至り、夫れより徒歩山上へと進む。山路は平坦では勿論ないが、さほど險でもない。極樂橋を渡ると高野槇の老樹古杉晝尙ほ薄暗い森林に入る。四十八曲りの不動坂に『アインシュタイン』を數へつゝ二時間の行程を終へて、今は名斗りの女人堂に着く。海拔千八百三十三尺の地。其處から黑門を這入ると金剛峰寺の境内となる。我等は高野の關所とも見るべき「參詣人所緣坊取調案内所」も無事にパツスして、先づ靈寶館に赴き、主任井村米太郎氏の歡迎を受け、その案内を以て愈〻寶物の拜觀に取掛かる。昨年本館建築以來、當山諸坊に所藏せる寶物は常に幾分づゝ此處に陳列せられ觀者の便を加へて居るが、偶〻昨日よりは靈寶館特別拜觀日に當り、各坊所藏の國寶以下萃を悉しく陳列せられ、紫雲殿には當山第一の寶物たる惠心僧都二十四才の筆と傳ふる燕脂の色濃かなる國寶阿彌陀二十五菩薩來迎圖三幅（有志八幡講）を始めとし、國寶淸盛血曼荼羅、（金剛峰寺藏）同金剛吼菩薩、（有志八幡講）弘法大師御影（傳眞如法親王御筆、俗に燒大師とて曾つて火災に罹りしも御姿毫も損せずと傳ふるもの、高祖院藏）國寶八宗論大日如來像（金剛峰寺藏）同釋迦如來涅槃像圖（應德三年奉寫金剛峰寺藏）同紅玻梨色阿彌陀如來（櫻池院藏）同善女龍王（金剛峰寺藏）同不動明王（傳願行上人筆、親王院藏）同勤操僧正（傳弘法大師筆內藤博士より唐風肖像畫の範と稱せらるゝもの普門院藏）同富麻曼荼羅（淸淨心院藏）同丹生明神、同狩場明神、（金剛峰寺藏）姫宮丹生明神は弘仁七年弘法大師が高野山に尋ね入れる時その地に同道し神地を擧げて大師に屬し密敎の護持を誓ひ、その御子である狩場明神はそのとき獵師の姿に現じて二犬を率ゐて指導せられたと傳ふ。）黑六字尊像（寶壽院藏）觀音像造立願文（貞應三年十一月二十日藤原敎家）三十六歌仙繪卷（印本二卷、詞、後京極良經筆、繪藤原信實筆）大塔緣起（後宇多法皇御撰、元應三年四月二日御法名宸翰）其他の陳列あり、南廊には有名なる國寶寶簡集（大日本古文書家わけ第一高野山文書に收む）國寶弘法大師行狀繪卷、國寶文館詞林、紺紙金銀字一切經（奧羽藤原秀衡寄附、奧書に淸衡、同夫人、同息女の施主名がある。）紺紙金字一切經（俗稱荒川經）高麗版一切經（石田三成寄進）豊太閤肖像、淺井久政、長政、同夫人の肖像等を見る。井村氏伊木敎授達の熱心なる說明に興盡きず。午前中に本館全部を見る能はず、一旦宿坊遍照光院に到つて晝食をとり、午後再訪す。隅廊に於ては千手觀音闍浮提金像、國寶水神金像、同釋迦如來諸尊像（弘法大師請來枕本尊）同阿閦如來銅像、同獨鈷三鈷五鈷を始め數十點、西廊にては國寶龍猛菩薩（傳弘法大師作）阿彌陀三尊（傳運慶作）其他十數點、放光閣にては國寶毘沙門天王（弘仁時代）等の十數點の諸佛像を拜した。今朝よりは本塾出身の

高木宮太郎氏も名古屋より參會して當館の拜觀を共にした。斯くて一行十二名は井村氏の東導にて大門を見學、更に金堂内を拜觀し、其他西院谷（谷とは區域を意味し全山を五谷に分つ）の諸院を訪れ、總本山金剛峰寺（こはもと大師の一山に命名せる總稱であつて現今の如く個別的の稱號ではなかつた。）に行く、當山の本坊である。關白秀次自刄の間と傳ふる柳の間等を見る。非河氏は『高野山の活字引』を以て目せられ、近くは朝日新聞に名作琅瑠璃『聚樂の榮華』を出せる人、今この處を訪ひて我等は特に得易からざる環境にあるを覺えた。

一の橋を渡つてゴルドン夫人の建立せる大秦景教流行碑の模造を右方に眺めて、愈〻奥院に向へば、十八町の間、本邦石塔の初めと稱せらるゝ多田滿仲墓（長德三年建立）に隣接せる最小の南龍院殿墓より駿河大納言忠長が其母崇源院の爲に建てた高さ三丈跌石八疊敷の宏大目を驚かすばかりの者に至る迄、宗派の異同を問はず、諸大名の競ひ建てたる石塔この地に在らざるなく、今は所謂成金輩の建碑を加へて貴賤道俗の別なく無數の石塔立ち並び、又蛇柳、棺懸櫻、水向所、俗稱水掛け地藏、玉川及び碑などがある。殊に注意すべきは慶長四年島津義弘同忠恒の建立にかゝる朝鮮陣敵方供養碑であつて、其の碑文三行目冒頭の「同十月」とあるは慶長三年十月の誤である事は人の知る處であらう。之を英譯せる碑（一九〇八年島津忠介氏建立）がその傍にある。『長者の萬燈貧者の一燈』を點ずる燈籠堂は薄暮既に閉されたれば、我等は骨堂より廻りて奥院大師入寂地に詣で、文永十年秋田城介泰盛所建の碑を見る。其形町石の大なるものである。

町石とは町卒都婆の俗稱であつて、大抵方一尺、高一丈一尺餘、上は五輪塔婆の形をなし、下に梵字と町數並に法名施主名を刻せるもので、慈尊院より大塔迄一町毎に一本、百八十本を建て胎藏界百八十尊を標し、又大塔より奥院迄三十七本あり、金剛界三十七尊を表す。大師在世當時に初建せる木造のものが廢滅に歸してより、覺敎上人の發願にて文永二年より貴賤に勸發して拮据十三年を經て建治三年石材を以て建立成就したるもの、其後安永年間と大正二年に再建或は修覆せられて今日の完成を見たるが、現存せる最古のものは文永三年（西暦一二六六年）丙寅十二月二十八日と刻せる奥院への三十五町目のものである。また慈尊院より町石道には、三十六町ごとに里石がある。これは鎌倉時代より三十六町一里の制度が實施せられたことの一證と見られ、町石と共に本邦里程標研究の好材料である。日全く暮れ小雨さへ降りそゝぎたれば、急ぎ往路を辿りて宿坊に歸らんとするに、更に寂寞を覺えず、墓もこれほど多くては却つて賑かさを增すやうである。夜、當山執行藤村密幢氏及び井村氏の訪問を受け、遍照光院に一夜を明かす。俗人の耳には佛法僧の聲も聞かれぬ。同行の石川青城氏隅成あり。

松門劃處小橋憑　院在孤雲最上層
犬吠一山秋意靜　有人敲戸乃非僧

註、相傳、弘法大師、就狩場明神之愛犬、發高野靈瑞之地、故山内多飼養犬矣

十七日早朝宿坊を發して、金剛三昧院に立寄り、貞應二年尼將軍政子の建立にかゝる特別保護建造物多寶塔（鎌倉時代の代表建築の一、當山火

災の際その災厄を免れたるもの）及び院内を拜觀して、一行下山の途につく。高野口より汽車、橋本より電車に乘り換へて大阪に出で、道頓堀に所謂精進落をなして解散した。時に午後三時三十分であつた。

次いで十一月二十一日、幸田教授の好意により、その所藏にかゝる書畫拓本等を展覽し、我等は今次の旅行の記憶を新たにすることを得た。本號の口繪はその時に見たものゝ一つである。

（大正十一年十月二十五日、間崎、山口生記）

口繪說明

摩耶夫人鍮像（栗原信充寫）　幸田成友氏藏

此の一小幅は絹本單彩にして、圖の大さ横八寸七分、長さ一尺五寸四分あり、右端に隋鑄摩耶夫人鍮像、大和法隆寺金銅安置の十七字を記し、左方下端に信充寫と記す、朱印の文字は信充の二字なり、即ち中央の主像は摩耶夫人にして高さ五寸六分あり、右脇下より生れ出でんとせるは釋迦、左右の二體は侍女なるべし、隋鑄とあるは何の理由によるか詳ならず、以上三體共もと法隆寺の所藏なりしが今は御物となりて容易に拜觀も得難ければ、本圖も亦聊珍とするに足らん。

此の像のことは穗井田忠友の觀古雜帖一に見ゆ、曰く侍女の「肩巾（ヒレ）ハ黃銅ノ薄板ヲ鏤透（マリスカ）シテ肩ト裾トニ釘メ飾之」、又曰く「天平十九年ノ法隆寺流記資財帳ニ載テ、金堅銅灌佛像壹具ト云ルモノ必是ナルベシ」と、但し、本像を灌佛像といへるは承認しかたく覺ゆ、

筆者柳庵は栗原氏なり、其書甚だ多く、柳庵隨筆の如きは弱冠の著述にして、且甚だ眞面目のものなれども、後年に至りてはブックー・メーカーの誹なきにしもあらず、柳庵畫を善くし、其書の挿畫も多く自ら畫けり、同人の　に題跋備考と題し高山寺の古寫經を研究せる寫本あり、京都富岡鐵齋翁の藏本には卷尾に翁自ら左の識語を記されたり、以て柳庵の小傳とすべし。

此書栗原柳庵所輯、柳庵名信充、稱孫之亟、後年剃髮號又樂、寛政六年七月廿日、生於江戸駿河臺、明治三年潤十月廿八日、沒于京都一條大宮西街、享年七十三、葬洛北栂尾高山寺、子某初住京都、後返東京、余屢過其寓居云。

因にいふ、本圖の舊藏者は下谷練塀町故中川得基翁にして、予が之を讓受けたるは明治四十年頃なりけん、翁の履歷一知る人少けれども、溫厚篤實頗る藏書に富み、而も一たび翁の手に入りたる版本寫本は、必ず翁の修補を經たり、糊、筆、錐、表紙、綴糸の類は常に翁の座右にありき、瓦冨文の如くに中川得基の四字を刻したる小形の藏印を捺したる書あらば、翁の遺書の一なりと知るべし。（幸田成友記）